都留春雄注

中國詩人選集 6

中国詩人選集　第6巻

昭和三十三年六月二十日　第一刷発行
昭和三十七年十二月十五日　第三刷発行

王維　©

定価二二〇円

注者　都留春雄

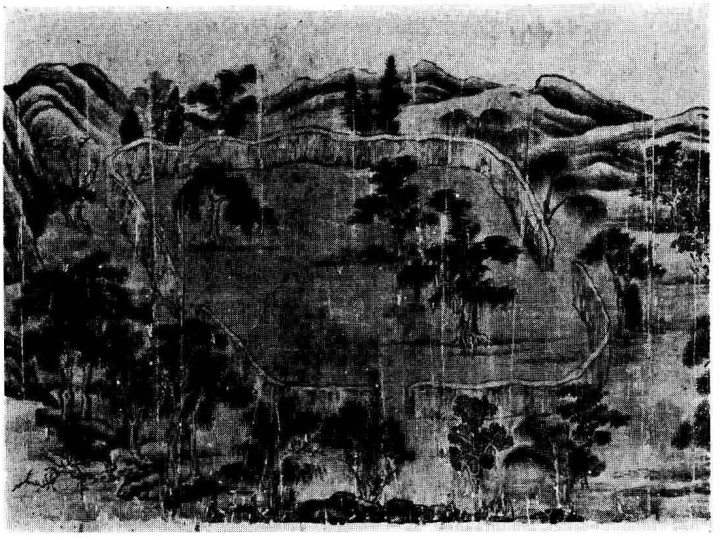
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

精興社印刷・三水舎製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします



孟城坳図　郭忠恕筆

王維像　富岡鉄斎筆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

解説……七

五言絶句

友人の雲母の障子に題す……二三
息夫人……二三
輞川の別業に別る……二四
班婕妤　三首……二五
送別……二七
臨高台　黎拾遺を送る……二八
孟浩然を哭す……二九
皇甫岳の雲谿の雑題　五首……三〇
鳥鳴磵……三一
蓮花塢……三三
鸕鷀堰……三三
上平田……三三
萍池……三三
雑詩　三首……三五
輞川集　并びに序……三八
孟城坳……三九
華子岡……四一
文杏館……四二
斤竹嶺……四四
鹿柴……四五
木蘭柴……四六

茱萸汸……四八
宮槐陌……四九
臨湖亭……五〇
南坨……五二
欹湖……五三
柳浪……五四
欒家瀨……五五
金屑泉……五七
白石灘……五八
北坨……五九
竹里館……六一
辛夷塢……六二
漆園……六三
椒園……六五

六言絶句

田園楽　七首……六六

七言絶句

九月九日　山東の兄弟を憶う……六六
寒食汜上の作……七七
送別……六八
盧員外象と崔処士興宗の林亭を過る……六九
白髪を嘆ず……八〇
元二の安西に使するを送る……八一
沈子福の江東に帰るを送る……八二
菩提寺の禁に、裴廸来りて相い看るに、逆賊等、凝碧池上に音楽を作し、供奉の人等、声を挙げて便ち一時に涙

下ると説く。私かに口号を成し、誦して裴廸に示す……八四
少年行　三首……八六

五言律詩

楊長史の果州に赴むくを送る……九二
張少府に酬ゆ……九四
輞川閑居　裴秀才廸に贈る……九六
使して塞上に至る……九七
岐王に従い楊氏の別業を過う　応教……一〇〇
偶然の作……一〇一
崔員外と同じく秋の宵に寓直す……一〇三
秋夜独坐……一〇六
虞部蘇員外の藍田別業を過られ、留まられざるの作に酬ゆ……一〇七
山居即事……一〇九
梓州の李使君を送る……一一〇
香積寺を過う……一一三
観猟……一一三
春中田園の作……一一五
終南山……一一七
山居秋暝……一一八
嵩山に帰りての作……一二〇
輞川に帰りての作……一二一
前陵に汎ぶ……一二三
新晴の晩望……一二四
終南の別業……一二六
劉藍田に贈る……一二八

五言排律

秘書晁監の日本国に還るを送る　并びに序……一三一

七言律詩

積雨輞川莊の作……一四〇

御製、蓬萊宮従り興慶に向う閣道中の作に和し奉る　応制……一四二

酒を酌みて裴廸に与う……一四五

四言詩

諸公の過わるるに酬ゆ……一四八

五言古詩

渭川の田家……一五四

瓜園の詩并びに序……一五六

殷遙を哭す……一六一

同題の七言絶句……一六四

別るる者を観る……一六五

納涼……一六八

送別……一七〇

従軍行……一七二

春夜、竹亭にて錢少府の藍田に帰るに贈る……一七三

青溪……一七五

藍田山の石門精舍……一七七

七言古詩

老将行……一八四

張五弟に荅う……一九三

付録

山中より裴秀才廸に与うる書……一六六
年譜……二〇一
跋……小川環樹……二三
略図

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

解説

一

王維は字を摩詰という。また晩年の官名により王右丞とも呼ばれ、李白や杜甫と同時の詩人として、鼎立、併称される。李白の詩は豪放絢爛であり、杜甫の詩は沈鬱雄渾である。それに比べると王維の詩は、典雅静謐で、李杜のように世界をも動かすほどなエネルギーと気魄とに欠ける。後に述べるが、王維は少年の頃にもう詩名があった。李杜が有名になるまだ以前にである（ひと頃の少女歌手を御想像いただきたい）。これは、李杜が比較的晩成の詩人であるのに対して、王維の大きな特色で、彼の詩を考えるのに見のがせない事実である。

さて彼は、杜甫のように世を憂えないし、また戦乱や腐敗した政治によって虐げられた人間の悲惨をうたわない。彼がもっぱらうたい、また強い関心を寄せたのは、自然の美、及び自然の一点景として融合した人間の生活の楽しさに対してである。彼はそれらを、田園詩人といわれる晋の陶淵明（本選集「陶淵明」を参照）、及び山水詩人といわれる劉宋の謝霊運、この両者の流れを受けつぎつつ詩に書きあらわすことによって、新しい美を創造し完成した。中国の自然は、彼に至って始めて新しい息吹きを与えられたと言ってよい。それも唐人らしいダイナミックな息吹きをである。

この故に、彼は自然詩人と称せられる。唐の自然詩人といえば、王維・孟浩然・韋応物・柳宗元のいわゆる王孟韋柳があるが、王維はその代表と目されるのである。

二

王維はまた、鄭虔（吉川幸次郎博士の「杜甫の友情」――昭和三十二年九月号の「新潮」所載――を参照）や、有名な呉道子と並び称せられる画家で、当時屈指の山水画の名手でもあった。画の方でも後世からは、南画の祖と仰がれている。（王維の絵画については、小林太市郎氏著「王維の生涯と芸術」にくわしい）

彼の絵画として有名なものには、彼の別荘である輞川荘を画いた輞川図（挿図及び「輞川集」の序と注三八ページ参照）がある。また彼が、玄宗皇帝の弟であり有力なパトロンでもあった岐王の為めに画いた大石の図は、或る暴風雨の日に稲光りと共に屋根を破り、当時の高麗の神嘗山上に飛んで行ったという（元の伊世珍の「瑯嬛記」）。「左甚五郎の竜が夜な夜な池の水を飲んだ」式の話であるが、彼の画が神品扱いされたひとつの証拠になろう。彼の画は、後人の種種の画評によると、神韻縹緲とただよっていて、いわゆる画工の画とはおのずから異っているという。

彼自身もいささか自信があったと見え、「偶然の作六首」（一〇一ページ参照）中で、「宿世　詞客に謬まらる、前身は応に画師なるべし」とも言っている。

彼の詩画について「詩中に画あり、画中に詩あり。」という批評が広く受け入れられるのも、うなずけることではあるまいか（宋の蘇軾の題跋「摩詰の藍田烟雨図に書す」に、「摩詰の詩を味わえば詩中に画

有り、摩詰の画を観れば画中に詩有り」とある)。

以上の如く彼は詩画に卓絶していたのであるが、彼の才能はこの二者のみに止まらなかった。書家としてもすぐれており、音楽に於ても深い造詣と才能を持っていた。「旧唐書」及び「新唐書」には次のような話を載せている。

或る人が奏楽の図を手に入れたが、その名が判らなかった。王維はそれをながめていて、此れは「霓裳羽衣曲」(玄宗皇帝の編曲になる有名な曲)の第三畳の第一拍ですよ、と言った。好事家があって楽工を集め実験してみたが、少しの違いもなかったので感服したという。

全く王維は、博学にして多芸、当時最高の文化人であった。王侯、貴族、豪族らの上流社会では、席を払って迎えざるものなく、特に寧王(玄宗皇帝の腹違いの兄)、薛王(全じく弟)は、彼を師友として遇したと伝える。つまり上流階級のサロンには、彼は無くてはならぬ存在だったのだ。

三

唐の薛用弱の「集異記」には次の如く記す。

「王右丞は、年いまだ弱冠(二十歳)ならざるに、文章に名を得たり。性つき音律に閑い、妙れて琵琶を能くす。諸貴(貴人達)の間に遊歴し、尤も岐王(前出)の眷重(目をかけ重んずる)する所と為る云云。」と。

年少にして詩人であり音楽家であった王維は、貴族達の寵児として生活したというのである。

すなわち王維は、単に詠む対象が李白、杜甫と異っていただけではない。詩人としての性格も、だいぶ

異っていたのである。より正しく言えば、李杜の方が王維とは異っていた、と言わねばなるまい。王維は六朝（呉・東晋・宋・斉・梁・陳の六王朝）時代からの伝統につながる宮廷詩人であり、李杜の方は、そうした伝統の規格にはまらない一風変った詩人で、当時はあったろうからである。

従って王維は、宮廷詩人のおおむねがそうであるように、李杜のような強い骨っぷしを持たなかった。社会に対し政治に対して、主張すべき自己を主張して凹まないという骨っぷしをである。然しながら、これは彼が全く骨のない柔弱一方の詩人であることを意味するのではない。

王維の時代に至るまでの中国の歴史をふりかえって見れば、漢帝国の統一が破れて以来、王朝は永くて六十年、短いものは二、三十年しか存続せず、然もそんな不安定な時代が四、五百年続いていたのである。そのあとを、唐の高祖皇帝李淵（即位六一八年）及びその子太宗皇帝李世民が収拾し、唐朝万代の礎石をきずいたのであるが、その時から玄宗皇帝の即位（七一三年）までに、約百年近い平和な時代が続いて、唐文化はまさにその花を開かんとしていた。永い間、底流として鬱積していた文化の苔が、思いきりふくらむ機を得たのである。その頃王維は生れた。更に玄宗皇帝の治世は四十余年の永きにわたり、唐朝の繁栄は頂点に達した。国威は遠く海外に及び、玄宗皇帝自身も英邁で文化に対する良き理解者であった。殊に玄宗皇帝前半の治世である開元（七一三―七四一年）年間は、政治が行き届いて、後年の安史の乱として表現されるような世情不安の兆など全くなかった。従って王侯、貴族、豪族達は、専ら快楽追求に没頭していた。

かくの如き時代の、かくの如き上流階級の中心にあって、しかもその寵児として王維は位置したから、杜甫に比べ当然快楽的な詩人であった。いかにも唐人らしく、ダイナミックで健康で明るくである。世は

まさに世界を以て唐となす気概に溢れていた。だから前述のように、彼に気骨がないと云っても、全く無気力な詩人であると考えてはいけない。無気力というのは、李杜と比較しての話である。

要するに彼は、六朝以来流れてきた詩の主流、政治の主流に順調に適応し、最大に自己を表現しようとした詩人である。その意味で当時の最大の詩人と言ってよかろう。当時のあまたの宮廷詩人的性格の人達は、おおむね彼に収斂されるのである。この点から言っても彼は、李杜と並んで当時の詩人を代表するものだと言える。彼の一見古淡に見える自然詩に豊麗なものが感ぜられるとすれば、彼が宮廷詩人であり、六朝時代の華麗な詩の伝統と、李杜以上に強く結びついていたからであろう。

四

以上第三章においては、専ら彼が健康な快楽をうたう宮廷詩人であることを述べたが、然し彼は、単なる宮廷詩人として終ったのではない。一方において彼は確かに宮廷詩人ではあったが、他方においては、第一章で述べたように、彼だけの世界、つまり自然詩人としての世界があった。彼の人生に対する快楽精神は、自然美と、それと全く融合して生活する喜びとをうたうことによって、その真骨頂が発揮されたのである。例をあげて見よう。

田園の楽しみ（七二ページ参照）

桃紅復含宿雨　桃は紅に復た宿の雨を含み
柳緑更帯春烟　柳は緑に更に春の烟を帯ぶ

花落家僮未掃　花落るも　家僮　未だ掃わず
鶯啼山客猶眠　鶯啼くも　山客　猶お眠る

第四句の「山客」は、彼自身を擬しているのであろうが、詩中彼も彼の下僕も、完全に麗わしき自然の田野に溶け込んで楽しげであり、また「詩中に画あり」という評のように、まさに一幅の画でもある。この点で陶淵明や杜甫とは対蹠的である（李白とは相い重なる部分があると思う。例えば本選集「李白」上四六ページの「山中問答」を参照）。陶・杜にとっては、自然は結局自分の帰着すべき究極の場所ではなかった。それに反して王維にとっては、此の詩のように自然こそ人生の究極の場所なのである。すなわち、彼自身美しき自然に溶け込み、その完全な一点景と化することによって、人間としての本来の姿を獲得し、みずからの生命が生き生きと流動する。一方自然もまた、彼を吸収同化することによって、はじめてその真価と光彩を発揮する――という、この両者間の微妙な融合。これが彼の詩の大きな特徴であり、また中国の自然詩が、彼に至って始めて完成されたと言われる所以でもある。全く中国の自然は、彼に至ってはじめて新らしい息吹きを与えられ、はじめて自然たり得た、と言ってよかろう。

参考までに、宋の胡仔撰「苕渓漁隠叢話」にでている同じく宋の黄庭堅（山谷道人と号す）の語を記して置こう。

山谷老人曰く、「余、頃年（近年）、山に登り水に臨むとき、未だ嘗って王摩詰の詩を読まずんばあらず。行きて水の窮まる処に到り、坐して雲の起る時を看る、（「終南の別業」詩一二六ページ参照）と。故に知りぬ、此の老の胸次には、定めて泉石膏肓の疾（骨の髄までしみこんだ自然を愛するという病気）有るこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton